

## 鼻の高さに刻まれたハルビンの記憶

横浜国際高校 高木子

「ハルビン出身の人は鼻が高い」そのような噂が語られることがある。ハルビンの冬は氷点下 20 度を下回り、その中で歩く人々は寒さで頬を赤く染め、吐く息は白くなる。その中で、横から見た時に、鼻筋の輪郭がくっきりと浮かび上がる顔立ちがよく見られる。

私は中国黒龍省ハルビン市で生まれ、小学校入学前までをこの街で過ごした。ハルビンは中国最北部に位置し、冬が半年近く続く。石畳が続く中央大街では、雪が踏み固められ氷のようになり、冰雪大世界の巨大な氷像が青や紫の照明を透かし、街全体が幻想的な光景に包まれる。今でも具体的な情景を思い出せる。そうした印象が生まれる背景にはハルビンという街が持つ文化、歴史、そして多様な人々の交わりから生まれている。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ロシア帝国が中国東清鉄道を建設したことをきっかけに、多くのロシア人がハルビンに移住した。その痕跡は、現在も街の景観に明確に残っている。街の通りにはロシア風の石造建築が並び、バロック様式の建物の壁面には細やかな装飾がある。市内にはロシア正教会が点在し、緑色の屋根の巨大なドームの聖ソフィア大聖堂は街の中心に立っている。また扉の内側からは聖歌が響き、鐘楼から鳴り渡る鐘の音が、冬の澄んだ空気の中を伝わっていく。こうした環境の中で、人々の日常や文化、暮らしの感覚や価値観が重なり合い、街全体の雰囲気なた形作られていった。結果として、現在でも「どこかロシア系を思わせる鼻の高い顔立ち」と語られているのだ。これは、「クレオール的な環境」が形成された一例である。ハルビンに語られる外見の印象は、こうした具体的な歴史と生活の積み重ねから生まれた街そのものの記憶なのだ。

ロシアと聞くと、排他的で強圧的な国家という印象を抱く人は少なくない。しかし、その印象をそのまま過去に当てはめるとは出来ない。ハルビンの形成に深く関わったロシア帝国期では、現在とは異なり、多民族・多宗教を内包する性格を強く持っていた。19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのロシア国内にはスラヴ系だけではなく、バルト系、コーカサス系など多数の民族が存在し、正教会に加えてイスラム教、ユダヤ教など複数の宗教が公的に認められていた。統治の現場では差別や緊張もあったが、制度上は、多様な民族と宗教を抱え込む現実的な共存が成立していた。このことからハルビンは多様性を内包した政治的・社会的性格がハルビンを多文化空間へと導いた。現代の戦争や政治状況だけ見れば、ロシアを「閉じた国」として捉えがちであるが、ハルビンの歴史を辿ると、ロシアの多民族・多宗教を抱え込みながら都市を形成した時代が存在していたことがわかる。

このような歴史を背負ったハルビンで生まれた私は、異なる文化や宗教に触れることを「世界の見え方を増やす経験」として受け止めてきた。ハルビンで過ごしてきた日々の記憶には、特定の文化が他を排除する光景はなく、人々は同じ都市空間を共有していた。その環境の中で私は、違いは距離を生むものではなく、理解の入り口になり得るという感覚を自然に身につけていった。

そのため私は、現代社会において特定の宗教や文化を一括して拒絶する姿勢に強い違和

感を覚える。ハルビンがそうであったように異なる文化が重なり合うことで都市は形を変えてきた。多様性は秩序を壊すものではなく、むしろ社会に柔軟性を与えるものだ、ハルビンという多文化が交差する場所で時間を過ごした私の考え方である。そして、「ハルビン出身の人は鼻が高い」という話を耳にするたび、私は単なる外見の特徴として受け取るのではない。それは歴史と多文化が折り重なって形作られた人々の交わりの痕跡が顔立ちの印象として語り継がれているのだと感じるからである。